

幼児期における文脈推論能力と方略の発達の検討： 指示対象付与における語用論的解釈の発達と障害

(中間報告)

九州大学大学院人間環境学府 村上太郎

Development of contextual inference and its strategies in preschoolers: Pragmatic interpretation in reference assignment

Kyushu University, Graduate School of Human-Environment Studies MURAKAMI, Taro

要約

コミュニケーションを成立させる上で不可欠な営みは相手の注意の所在を理解し共有することである。そして言語的コミュニケーションにおいて聞き手は他者の発話から推論を行い、解釈を行う必要がある。本研究では文脈から推論する処理として指示対象付与に着目する。指示対象付与とは、ある表現が誰／何を指しているかを確定するために聞き手が行っている語用論的処理であり、とりわけ指示語を用いた文章を解釈する上では必須の処理である。語用論に関する先行研究の多くは、成人の会話データに基づいて理論的検討を加えてきたものの、幼児期における実証的検討はほとんどなされていない。本研究は、Murakami & Hashiya(2011)で用いられた課題に変更を加えることによって、他者の「これは？」という発話を解釈する際に幼児が何を手がかりとしているかを明らかにし、さらに発達障害児は文脈推論の非定型さを有するかどうかを明らかにすることを目的とする。

【キー・ワード】 語用論, 推論, 指示対象付与, 実行機能

Abstract

To establish a communication, it is necessary to understand the focus of others attention and to share with her/him. And in verbal communication, hearer has to infer from the utterance of others and to interpret. In this report, we focus on reference assignment. Reference assignment is a pragmatic process to identify what expression refer to, in particular, it is important to interpret the sentence include the deictic. Many theoretical researches on pragmatics have dealt with the corpus data of adults but there were few experimental studies of children's ability of pragmatic interpretation. By modifying the task invented by Murakami & Hashiya (2011), we examine what contextual cues used in interpreting the utterance "How about this?" by typical children and whether the children with developmental disorder have the atypical characteristics of contextual inference or not.

【Key words】 pragmatics, inference, reference assignment, executive function

はじめに

コミュニケーションを成立させる上で不可欠な営みは、相手の注意の所在を理解し共有することである。我々が意識的ときには無意識的に行っているこの営みは、言語的・非言語的コミュニケーション双方にとって運用上不可欠なものである。特に、言語的コミュニケーションにおいて、聞き手は統語情報の処理に加えてコミュニケーション上の情報処理も行う必要がある。コミュニケーション上の情報処理、つまり他者の発話をどのように解釈するかという問題に取り組む領域が語用論であり、近年注目を浴びている。

語用論研究と発達

語用論研究における中核的問題は、発された文章の意味と話者の意味（意図）とのギャップを埋めることであり、Sperber & Wilson(2002)は他者の発話を解釈する際の推論モデルの重要性を指摘している。Sperber & Wilson(2002)が指摘する推論モデルはややモジュールに近いものとして想定されており、モデルの統合的な理解については検討の余地があるが、語用論的処理においては、他者の発話を解釈する際、聞き手は文脈的に幅広い利用可能な解釈の中から聞き手にとって最も顕在的でアクセスしやすいものを選ぶ(Gernbacher, 1995; Sperber & Wilson, 1986/1995; 2002), という知見が一般的になりつつある。しかしながら、語用論研究は検討すべき点をまだ多く残している。まず、従来の語用論研究は成人の発話データを対象にしたものが多い、という点。そして、幼児を対象とした語用論研究は発達障害児における「語用障害」の特徴を解明していくものが多く(大井, 2006; 田中・神尾, 2007 のレビューを参照), 語用論的推論の定型発達過程をターゲットにした発達心理学的研究はほとんどない、という点である。発達の初期から早期にかけては、明示的な伝達意図を認知することの重要性(Csibra, 2010)や、社会的学習における社会—語用スキルの重要性など、重要な知見が蓄積してきているものの、言語を操るようになってきた幼児期における語用論的コミュニケーションの研究はそう多くないのが現状である。

文脈推論と指示対象付与

幼児期における興味深い文脈推論能力として、他者の指示意図を文脈から推論する際に行う語用論的処理として指示対象付与が挙げられる。指示対象付与とは、ある表現が誰／何を指しているかを確定するために聞き手が行っている処理のことで、とりわけ指示語（「こ・そ・あ」など）を用いた文章を解釈する上では必須の処理である。日本語における指示語の理解と産出は 2 歳半から 3 歳にかけて出現し始めることが示されており(Hamasaki, 2002), 他者の指示意図を文脈に基づいて推論する基盤として発達の重要なものと考えられる。Murakami and Hashiya(2011)は指示対象付与パラダイ

ムを用いて、定型発達の3歳児と5歳児に対して調査を行ったところ、解釈に用いられる指示対象が2つ明示されるという文脈を提示した後の「これは？」という発話に対して3歳の成績高群は5歳の成績高群と異なる指示対象付与を行うことを示した。加えて課題成績の高低を分ける要因として、認知シフトといった実行機能的な能力が背景にあることも示唆した。

本研究の目的

Murakami & Hashiya(2011)によって3歳児は5歳児と異なる発話解釈の方略を取っていることが示唆されたものの、まだ明らかになっていない点もある。一つ目は、幼児は何を手がかりにして他者の発話を解釈しているのか、という点である。本研究では、Murakami & Hashiya(2011)で用いられた課題に変更を加えて先行する文脈の違いによって幼児の発話解釈が異なるかどうかを検討することを目的とする。また、推論過程に定型／非定型があるかどうかを検討するために、発達の「気になる子」における文脈推論の方略を調査し、さらに推論の背景にあるメカニズムについても検討を行っていく。

現在の進捗状況と今後の展望

保育園に通う定型発達児（3歳児36名・5歳児36名）を対象に、Murakami & Hashiya(2011)で用いられた指示対象付与パラダイムに変更を加えた条件を実施し、分析を行っているところである。

また、地方自治体が実施する療育事業に参加している幼児（診断を受けている児、グレーゾーンの子も含む）を対象に、知的水準、コミュニケーション発達尺度(村上, 2012, 印刷中)、抑制課題(Dimensional Change Card Sort 課題; Zelazo, Frye & Rapus, 1996; Kirkam, Cruess & Diamond, 2003)を含めたテストバッテリーを組んで、課題間の比較ならびに定型発達児との比較を行う予定である。

引用文献

- Csibra, G. (2010). Recognizing Communicative Intentions in Infancy. *Mind & Language*, 25(2), 141-168.
- Hamasaki, N. (2002). The Timing Shift of Two-Year-Olds' Responses to Caretakers' Yes/No Questions. In: Shirai, Y., Kobayashi, H., Miyata, S., Nakamura, K., Ogura, T. & Shirai, H. (Eds.). *Studies in Language Sciences (2) - Papers from the Second Annual Conference of the Japanese Society for Language Sciences*. 193-206.
- Kirkham, N. Z., Cruess, L., and Diamond, A. (2003). Helping children apply their knowledge to their behavior on a dimension-switching task. *Developmental Science*, 6:5, 449-476.
- Moriguchi, Y. & Hiraki, K. (2009). Neural origin of cognitive shifting in young children. *PNAS*,

106(14), 6017-6021

Murakami, T., Hashiya, K. "Development of Contextual Inference about the Ambiguous Referent in Other's Utterance: Experimental comparison between 3- and 5-year-old children" Association for the Scientific Study of Consciousness, Kyoto, June, 2011.

大井学 (2006). 高機能広汎性発達障害にともなう語用障害: 特徴, 背景, 支援. *コミュニケーション障害学*, 23(2), 87-104.

Sperber, D. & Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Sperber, D. & Wilson, D. (2002). Pragmatics, Modularity and Mind-reading. *Mind & Language*, 17(1 and 2), 3-23.

田中優子・神尾陽子 (2007). 自閉症における語用論研究. *心理学評論*, 50(1), 54-63.

Zelazo, P. D., Frye, D. & Rapus, T. (1996). An Age-Related Dissociation Between Knowing Rules and Using Them. *Cognitive Development*, 11, 37-63.